～みんな同じ空の下～

第３次福祉21ビーナスプラン

（第３次茅野市地域福祉計画）

2018－2027

～お互いに支え合い、その人らしく暮らせるまちづくり～

長野県　茅野市

私のことを気にしてくれる人がこの空の下にいる

いつまでも住み慣れたこの家で暮らしたい

お年寄りや障害のある人が明るく安心して暮らせる地域づくり

支える心が時には支えられ

「お互いさま」と忘れかけた言葉を心の中で育てたい

茅野市のいたる所で動き出している『支えあいの心』

みんな　同じ空の下で生きている・・・

茅野市の挑戦
～茅野市版地域包括支援体制の構築～

茅野市長　柳平　千代一

茅野市では、初めて福祉２１ビーナスプラン（茅野市地域福祉計画）を策定した平成 12 年（2000 年）を「地域福祉元年」とし、「地域包括支援体制の定着」を基本とした総合的な地域福祉の推進に取り組んできました。この計画に基づき、身近な地域での公的サービスと住民の支え合いのサービスを組み合わせて、地域の中でその人らしい生活が送れることを目指し、４つの保健福祉サービスセンターの開設・運営を行っています。また、「福祉でまちづくり」をより身近な地域で進めるために、行政区・自治会での福祉推進委員の設置や地区ごとの「地域福祉行動計画」の策定により、地域の課題の整理や解決を「我が事」として話し合い、支え合う仕組みを構築してきました。

第３次プランは、今までの福祉２１ビーナスプランの基本理念やシステムを継承しつつ、第５次茅野市総合計画の保健・医療・福祉分野の基本計画として位置づけました。子どもからお年寄りまでお互いに助け合い、顔の見える生活が送れるような地域共生社会の実現に向け、茅野市の２１世紀の福祉を創る会と茅野市、茅野市社会福祉協議会が一体となって、「生活全体の包括」「対象の包括」「支援の包括」「つながりの包括」の４つの包括を切り口として、「丸ごと」の支援体制の構築を目指します。

茅野市はこれからもみなさんと共に悩み、共に考え、「人にやさしくお互いに支え合うまち、住んでてよかった茅野市」を目指し、「福祉でまちづくり」に挑戦し続けます。この計画の実現に向けて、市民みなさんのご協力をお願いいたします。

第３次ビーナスプラン：10年後の期待する姿は？

福祉２１茅野 代表幹事　小口　晋平

第３次福祉２１ビーナスプランがここにできあがりました。第２次福祉２１ビーナスプランが始まってから 10 年の時が流れ、この間に人は変わり、また社会も変わりました。第３次プランを計画するに当たり、まず第２次プランの検証から始めて、これから先にある 10 年後のありたい姿を想像しつつ、プランを練り上げました。

第３次福祉２１ビーナスプランの最も大きな特徴は「茅野よいてこしょネット（第２編第１章参照）」です。これは社会的包摂を基本理念に「すべての人がその人らしく生きていく」ための社会基盤やシステムの方法論であり、かつ実際に運用するための行動指針でもあります。ひとことで言えば、これまで支えられる側だった人でも、今度は支える側に回ることも可能になるような、そんな可逆性、循環性を包含できる社会を構築するための、個人や社会の相互扶助システムまたはネットワークです。そして、これまでのように福祉で活躍する人の繋がりを福祉、医療の職種（＝多職種連携）に留めず、例えば製造業やサービス業など、他のいろいろな業種の人にも関わってもらう（＝多業種連携）社会を目指します。さらに最近では、工場や一般事業所も企業倫理として地域福祉、地域貢献のために様々な活動をしていく時代となり、医療、保健、福祉などの特定の職種のみが社会福祉を担っていく時代から様変わりしつつあります。一つの個体（人や団体）が他の単数または複数の個体と２次元で結びつき、さらに３次元でも融合していきます。その上、時間の壁も越え４次元でも結びつく様を想像してみて下さい。混沌としつつも、人も団体も有機的に、一見無秩序に見えても、しっかりとしたポリシーを持って密に結びついていく、そんな姿を「茅野よいてこしょネット」と呼びます。そこには止めどなく広がっていく福祉の大きな「輪」が完成していきます。地縁、血縁、老若男女にこだわらず、同じ志や趣味などで繋がる連携の「輪」があります。10 年後には多くの「輪」が、その人らしく暮らせるまちづくりに大きく寄与している社会を期待しています。

もう一つの大きな特徴は、第３次プランでもこれまで同様「パートナーシップのまちづくり」の手法で創り上げたことです。「福祉２１茅野」の活動は、20 年前から市民と行政と社会福祉協議会がパートナーシップの手法を用いて継続してきました。パートナーシップとは市民と司人（行政・社協）にとって「部下でもなく、上司でもない」という不思議な関係性ですが、ここには双方の強い信頼関係が存在します。もちろん一朝一夕でそれはできあがりませんが、醸成された信頼感を礎にして、この三者が協力し、持っている能力や行動力を活用していくという手法なのです。自分の愛する街を自らの手で創り上げていく歓びは、何にも勝ることでしょう。

さあ、始めましょう！「明日の茅野市へ」向かって。

福祉２１ビーナスプランのめざすもの

茅野市行政アドバイザー
日本地域福祉研究所　　原田　正樹

第３次福祉２１ビーナスプラン（茅野市地域福祉計画）が策定されました。茅野市では2000年（平成12年）を「地域福祉元年」として、本格的な地域福祉の取り組みを推進してきました。

すでに茅野市では定着してきましたが、大きな特徴は３点あります。ひとつは、この計画の根幹には「包括的な」ケアマネジメントの考え方があること。それも介護保険制度による高齢者だけを対象にしたものではなく、当初から０歳から100歳というすべての地域住民を対象にしたケアマネジメントを考え、それが推進できるような仕組みを構想したことです。今日的に言えば、地域共生社会を意図した「地域包括ケアシステム」を構築してきたのです。その拠点が市内４ヶ所の「保健福祉サービスセンター」です。身近な地域で総合相談支援ができ、積極的にチームアプローチ（多職種連携）とアウトリーチ（訪問活動）ができる体制をつくってきました。

二つ目の特徴は、医療と福祉の連携が「地域」を基盤にしてできていることです。地域包括ケアシステムを推進する際に、医療・介護・福祉の連携の重要性が指摘されますが、それは単なる仕組みだけのことではありません。専門職のネットワークだけのことではなく、その中心にいる住民をどう捉えるか。「患者」として見るのか、「要援護者」として見るのか、茅野市のビーナスプランでは「生活者」として見ようとしてきました。その人らしく生活できるように、あるいは「いのち」を支える、というコンセプト（理念）を大切にしてきました。よって医療関係者は「後方支援」に徹してきました。「患者を地域で支える」のではなく、「その人に何かあればすぐに医療が支えられる」体制をつくってきました。また医療も福祉も「地域づくり」をめざすことで、同じ方向にむいて連携ができたことも他の地域では見られない力になっています。

そして三つ目は、地域福祉の推進にあたっては、保健・医療・福祉の連携だけではなく、生涯学習を位置づけて、地域住民の参加と協働を大切にしてきたことです。制度・サービスの充実も重要ですが、それだけでは安心・安全の地域づくりはできません。自分たちの地域を住みやすくしていくために、住民自らも関わっていく。それは行政に押し付けられた参加ではなく、地域における住民自治を実現していかなければなりません。そのために生涯学習として「パートナーシップのまちづくり」を位置づけ、「福祉２１茅野」の円卓会議による進行管理、また各地区で「地域福祉行動計画」を策定し、プロセスを大切にすすめてきました。

しかし当然ですが、課題がないわけではありません。というよりも、ＰＤＣＡを丁寧にしているのですから、次々に課題が見えてくることは、むしろ評価されるべきことです。第３次の計画策定にあたっても、理念の継承の形骸化、支援の質（専門性）の向上、活動のマンネリ化、行政職員や関係者の意識の低下、参加する住民層の高齢化や無関心、さまざまな課題も抽出されました。

とくに見直しにあたって当初の課題は「保健福祉サービスセンターを合理化すべき」という意見でした。本当に４ヶ所も必要なのかという反対意見です。様々な検討の結果、最終的には、「もっと身近な地域での支援・協働の必要性」が採択され、第３次では、４層（地区）を基本単位に、５層、６層に働きかける仕組みが提案されました。こうして智恵を出し合いながら、次の時代を切り拓いていくのが、茅野市の底力だと改めて感じました。ビーナスプランは構想の段階から、実施、定着の時期を経て、次の課題に挑戦し続けているのです。